

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	図書寮本『類聚名義抄』院政期点における漢音声調
Author(s)	佐々木, 勇
Citation	国語国文 , 75 (4) : 12 - 29
Issue Date	2006-04-25
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00025481">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00025481</a>
Right	Copyright (c) 2006 by Author
Relation	



# 図書寮本『類聚名義抄』院政期点における漢音声調

一一

佐々木 勇

## 一、従来の研究と本稿の目的

図書寮本『類聚名義抄』は、院政時代一一〇〇年頃の書写・加  
点であると考えられている。<sup>①</sup>

この図書寮本『類聚名義抄』では、掲出漢字の漢音を注する方  
法に、次のものがある。

- ① 反切注    ② 同音字注（「音与〇同」型を含む）    ③ 「〇  
之去声」「〇上声」型の注    ④ 掲出字・反切・同音字注へ  
の声点    ⑤ 掲出字・反切・同音字注への仮名音注（いわゆる  
類音字表記の「火」を含める）

このうち、①反切注のほとんどは、中国の韻書・字書からの直  
接または間接引用であることが、本資料の出典注記から知られ  
る。

また、②同音字注、およびこれに準じる③形式の注も、出典が  
示されているものとはより、出典不明記のものも、「中国の規

範にかなり忠実なもの」であることが明らかにされている。<sup>②</sup>

④のうち、掲出字声点については、詳細な検討が加えられてい  
る。その結果、平声・入声に輕重を区別する六声体系に基づく加  
点であり、かつ、大部分、『廣韻』の声調と一致することが明ら  
かにされている。<sup>③</sup>

また、④⑤のうち、反切・同音字注の声点および声調表示を兼  
ねた仮名音注から知られる声調も、『廣韻』の声調にほとんどす  
べて一致している<sup>④</sup>、とされている。<sup>⑤</sup>

本稿では、まず、本資料に加点された朱声点および声調表示を  
兼ねた朱仮名音注の全体を調査し、先行研究で指摘された事柄  
が、本資料の全体に及ぶものか否かを確認する。その際、掲出  
字・反切上字・反切下字・同音字・その他、に分けて整理する。  
そして、それに基づいて、本資料の調点から知られる漢音声調体  
系を導くことを目的とする。

さらに、掲出字・反切上字・反切下字・同音字における、それ

それぞれの加點の差を明らかにし、その差の原因を、背景にある漢音声調から説明することをも目指す。

なお、研究の性格上、複製本による調査では、不明な点が残る。そこで、原本によつて、複製本では判然としない点を確認した。<sup>6)</sup>

## 二、漢音を示す声点・仮名音注の種類および両者の関係

まず、本稿の対象となる、漢音を示す声点と仮名音注の種類、および両者の関係について述べる。

### 1. 声点・仮名音注の種類と加點時期

掲出字への朱声点は、清濁を区別していないため、それを区別している注文の反切・和訓等の声点よりも早く加點された、とされている。さらに、掲出字声点には、大小の別があり、小さな声点は注文の和訓などへの声点と同時に加點されたものであろうことも言われている。たとえば、掲出字への唯一の濁声点加點例は、「衆 平」(網) (上) ノ 平 ミ 平 美」(二九七七(二九七頁7行目の意。以下同じ))の文選読みの例であつて、和訓と同時に加點された別筆声点である、とされる。<sup>7)</sup>

この点を原本について見ても、掲出字声点には大小があること

が確認できた。

その大きな朱声点は、声調表示を兼ねた朱仮名および句頭・句切りの点と同筆であらう、と判断された。

一方、小さな朱声点は、和訓・反切・同音字注の声点と同一に見え、同時に加點されたものであらう、と思われた。

そして、単字掲出字には大きな声点が多く、異体字とともに記した正体字に加點された声点には小さなものが多い、といった傾向は見出せる。

しかし、それはおよそその傾向であり、大小の声点は完全には使い分けられていないし、大小の判定に迷う声点も少なくない。

また、右の文選読みの掲出字に加點された声点も、他の掲出字声点と別筆とは認められなかった。

そもそも、和訓を連続させる文選読みでは漢語に濁声点を加點し、その他の掲出字には単声点のみを使用する加點を、同一人物が行なつても不思議なことではない。

濁声点を用いない声点と濁声点を用いる声点とを、掲出字と注文、および、意識字と音訳字とで使い分けた音義として、唐招提寺蔵『孔雀経音義』院政初期点を挙げる事ができる。<sup>8)</sup>

したがって、本資料における大小の声点は、書き分けの傾向は認められるものの、同時の加點であると判断する。よつて、本稿

では、大小の声点を区別せず、一括して処理する。

また、漢音を示す朱仮名音注も、一筆であると見られる。ただし、「濁<sup>ダ</sup>」(二六七)における「タク」のみは、別筆と判断される。<sup>9)</sup>

## 2. 声点と仮名音注との関係

本資料の声点と声調表示を兼ねた仮名音注との関係については、仮名音注は、「声点と併記されているばあい、声調を考慮にせずにかかれているが、そのほかのばあいには、「第6図」に示めされるような体系で、そのしるされる位置によって、声調が同時にしめされるようになっていく」という指摘がある<sup>10)</sup>。「第6図」は、平声・入声に輕重を区別する六声体系の加点位置を示した図である。

ただし、小松論文では、「声点とかな表記の字音とが併記されているもの「二九例」とし、そのうち八例を挙げるのみで、他例は省略されている。<sup>11)</sup>

そこで、まず、本資料において、「声点とかな表記の字音とが併記されているもの」を抜き出してみた。すると、左の二三例を見出せた。<sup>12)</sup>

以下、それを、加點字の位置によって分類して掲げる。(印刷

の都合上、仮名音注はすべて右傍に、仮名に付された<sup>13)</sup>はその仮名の下に、記す。)

A. 掲出字に加點されたもの(二例)

栗<sup>ツ</sup>(平) — (網)(上西ノア平ミ(平) 異(二九七七)

B. 反切上字に加點されたもの(無し)

C. 反切下字に加點されたもの(四例)

俱<sup>ツ</sup>(平) (二〇五六) 逼<sup>ツ</sup>(平) (三一七一) 登<sup>ツ</sup>(平) (二五一二) 響<sup>ツ</sup>(去) (一五七)

D. 同音字に加點されたもの(二五例)

狹<sup>ツ</sup>(入) (二二三) 棹<sup>ツ</sup>(去) (一一七一) 蟠<sup>ツ</sup>(平) (一八四) 輶<sup>ツ</sup>(平) (二七二) 些<sup>ツ</sup>(去) (四四二) 籠<sup>ツ</sup>(平) (五二二) 庶<sup>ツ</sup>(去) (五三三) 狹<sup>ツ</sup>(去) (二九五五) 驛<sup>ツ</sup>(入) (三二〇七) 眇<sup>ツ</sup>(上) (三二七二) 弦<sup>ツ</sup>(平) (三三〇三) 邑<sup>ツ</sup>(入) (三三五四) 嫺<sup>ツ</sup>(入) (三三五五) 驛<sup>ツ</sup>(入) (三四二一)

E. 上記以外の注文字に加點されたもの(三三例)

濺<sup>ツ</sup>(去) (二〇四) 訥<sup>ツ</sup>(入) (一六九四) 囊<sup>ツ</sup>(平) (三四二四)

以上、声点と併記された仮名音注二三例は、いずれも声調を表示していない。これは、声点が加點されていない漢音の仮名音注が、原則として、声調表示を兼ねることと対照的である。

このように、本資料において、漢音を表示した朱声点と朱仮名

音注とは、強い相関がある。したがって、右の仮名音注と声点とは、同時に加えられたものであらうと思われる。

### 三、声点

#### 1. 掲出字声点

図書寮本『類聚名義抄』の掲出字声点は、九十例の加點例について分析済みである。筆者も、全例について、それを確認した。

よって、ここでは、原本調査の結果、新たに知られた点を付け加えるのみとする。

A. 小松著書には挙げられていないが、原本では声点が加えられている例。

(掲出字を単字形式にあらため、必要な音注のみを引用する。へ内は、割注。以下同じ。)

a 慙〔平〕 〔去〕 (干云上通) (二六九一)

b 礦〔平〕 (順云音黄〔平〕 (以下、略) (一四八七)

右二例の声点は、いずれも紙端の虫損部分への加點であり、原本によってかろうじて確認できるものである。

a は、注文に音注を持たない例で、正字体に声点を加點する類に加えられる。

b は、注文の音注に声点加點し、なおかつ、掲出字に声点を加

図書寮本『類聚名義抄』院政期点における漢音声調

点した例である。当該例に声点加點が見られる理由は明らかでない。しかし、これに続く、「礦」(字書亦礦 公云廣 ア〔上〕ラ〔上〕カ〔上〕ネ〔上〕 同礦〔上〕 (一四九一) に対する正字体と判断しての声点加點であるとすれば、a と同類となる。

B. 複製本では声点のように見えるが、虫損である例。

帯 (二八二七) (小松著書四三七頁では、去声点加點例としている。)

#### 2. 反切上字声点

掲出字以外に加點された、漢音声調を示す声点については、本資料の全体を調査した報告がなされていない。そこで、以下に、声点の全体を整理する。対象とするのは、呉音・和音を排除した、掲出字直下に続けて記される注文である。

その中で、反切上字への声点加點は、全一三二例見られる。

それを『廣韻』の声調清濁に対応させると、後掲表1となる。

表1に見られるとおり、『廣韻』声調に原則として一致している。『廣韻』声調とずれが見られるのは、唯一、次の例である。

璞〔真云正〕 角〔反〕 反〔二六七四〕

表中では、『廣韻』平声全清としたが、「正」字は、『廣韻』に上声全清山母および上声次濁疑母の音も掲載されている。しかし、入声に記載は無い。ただし、日本漢音では、古くから入声字

表1 図書寮本『類聚名義抄』反切上字声点

廣韻／点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	5	2	31	13												
平輕	35	6														
上					3	2		9								
去									1	1	1					
入輕													6	2		7
入	1													1	4	2

として認識されていたらしく、醍醐寺蔵『妙法蓮華経釈文』平安後期点に、「質<sup>シヤ</sup>（入聲）（眞<sup>ビツ</sup>（平聲）「疋<sup>ビツ</sup>（入聲）反」（二五二）、久遠寺蔵『本朝文粹』鎌倉中期点にも「疋<sup>ビツ</sup>一夫」（二二七）の例が存する。

表1から平声軽点は、平声全清・次清字に限って加點されていることが知られる。そして、入声軽点は、全濁字以外の入声字に加點されている。

右から、本資料反切上字声点における平声・入声軽重の区別は、日本漢音声調と「廣韻」声調清濁との対応原則に合致している、と言える。

なお、全濁上声字には声点加點が存しないため、全濁上声の去声化については言及できない<sup>18)</sup>。

### 3. 反切下字声点

反切下字への声点加點例は、全八四七例である。

それらを、「廣韻」の声調清濁に対応させると、後掲表2となる。

表2から、反切下字声点も、「廣韻」声調に原則として一致していることが知られる。

ただし、反切上字声点と比べて、軽重の区別に、日本漢音声調と「廣韻」声調清濁との対応原則に合わないものの比率が高い。

表2 図書寮本『類聚名義抄』反切下字声点

図書寮本『類聚名義抄』院政期点における漢音声調

廣韻 ／点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	47 (3)	1	62 (3)	93							1					
平輕	86 (2)	2	2	4												
上	1		4		51 (2)	7	20 (1)	61 (1)	3							
去					1		1		113 (9)	4	22 (2)	54 (2)				
入輕													70 (1)	8	11	64 (1)
入													28 (1)	1	16	8

下段の〈 〉内は、仮名注音による声調表示を同様に処理した数で、外数。

これは、輕重清濁を示す反切上字とは異なり、四声を示す反切下字には輕重を正確に示す必要はない、という意識の表われかと考えられる。

また、反切上字と違い、『廣韻』の四声から外れる例も存する。

A. 全濁上声の去声化を反映した例

その中で、『廣韻』の全濁上声字に去声点が加えられたのは、次の例である。

壓油（略）東云（略）烏<sub>（平輕）</sub>簞<sub>（去）</sub>烏牒<sub>（入）</sub>六反（二二〇一）

「簞」は、『東宮切韻』から引用した別音五番目の反切下字である。この「簞」は、『廣韻』には上声以外には掲載されていない。天治本『新撰字鏡』に「田點反」（八五ウ）、箋注『倭名類聚抄』に「蔣鮎切韻云、簞、（徒玷反、上声之重、（以下略）」（六七〇才）とあり、日本でも、上声字として認識されていたと考えられる。ただし、慧琳『一切経音義』には、「旦難反」（七九二九）と去声字を反切下字とした例が存し、中国において去声化していたことが知られる。

よって、本資料の右例は、「全濁上声の去声化」の反映例である可能性がある。

先行研究では、本資料の反切字声点は、全濁上声の去声化を反映していない、とされていた。<sup>(20)</sup> それ故、一例とはいえ、重要な例である。

他に、『廣韻』声調から外れるものとして、以下の例がある。

B. 掲出字声調と一致する声点を反切下字に加点した例

郎〈應云於古<sub>平</sub>反〉(二七七)

反切下字「古」は、『廣韻』上声全清模韻の字である。しかし、被注字「郎」は、『廣韻』で去声にも掲載される。ここでは、その音を加点したのではないかと解釈される。

次の例も、同様に解釈される(当該加点例を含む反切のみ記す)。

倅〈徒甘<sub>平</sub>反〉(二四一四)〔倅―上声全濁・去声全濁・平声全濁〕

C. 加点理由不明の例

路〈敷救<sub>平</sub>反〉(二一六)〔路―去声次清・入声全濁〕

意〈弘云於記<sub>上</sub>反〉(二三八一)〔意―去声全清〕 悲〈弘

云於<sub>平</sub>睡<sub>平</sub>反〉(二五一五)〔悲―去声全清〕

右の反切下字「救」「記」「睡」および被注字「路」「意」「悲」

は、『廣韻』で去声に所属している。また、切韻逸文・『玉篇』・玄応『一切経音義』・慧琳『一切経音義』・希麟『統一切経音義』にも、加点された声点に合う注は無い。

よって、本資料における上声あるいは平声点の加点理由は、不明とするしかない。

#### 4. 同音字注声点

本資料の同音字注には、「公任卿」「公」と冠したものがあられ、それが、公任『大般若経字抄』からの引用であることが明らかにされている。<sup>(21)</sup> そして、「公任卿」「公」とされた同音字注に加点された声点は、以下に若干例を掲げた如く、呉音声調と一致するものが多い。よって、この音注は、今回の対象から外した。

ただし、公任『大般若経字抄』からの引用中に、「正〇」として、正音をも引いた例が存する。その中で、本資料に声点が加点されているのは、次の例である。<sup>(22)</sup>

瑕〈公云音計<sub>平</sub>正河<sub>平</sub>〉(一六四二) 洩〈應云勅計<sub>去</sub>

反(略)順云夷<sub>平</sub>(略)公任卿云音低<sub>平</sub>正弟<sub>去</sub>〉(三七

二) 譚〈應云許虐<sub>入</sub>反(略)公云音逆<sub>入</sub>正虐<sub>入</sub>

還<sub>平</sub>〉(八二七) 環〈公云音貫<sub>去</sub>タ<sub>平</sub>マ<sub>平</sub>キ<sub>上</sub>正

還<sub>平</sub>〉(二六一四)

右のうち、「正〇」として引かれた音注への声点は、『廣韻』声調と一致する。

よって、この四例は、今回の対象とする。



この四例を含め、図書寮本『類聚名義抄』の同音字注に加点された、漢音声調を示すと考えられる声点は、全六九七例である。この六九七例を、『廣韻』の声調清濁に対応させると、後掲表3となる。

表3に見られるとおり、本資料の声点加点は、『廣韻』声調と原則として一致している。

ただし、反切上字を整理した表1と比較すると、平声・入声の軽重の区別に異例が多い。また、表1・表2と比較して、『廣韻』声調から外れる例が多い。

以下、『廣韻』声調と異なる声点加点例について、検討する。

A. 全濁上声の去声化を反映した例

蹠撰〔音撰〕<sub>〔去〕</sub>（以下略）（二三三七）〔撰〕は呉音平声

補繼〔類云善〕<sub>〔去〕</sub>音（以下略）（三三三二）

〔善〕は呉音平声濁

方一〔聲〕（順云俗音奉）<sub>〔去〕</sub>強（平）（一五六七）

〔奉〕は呉音平声濁

桃花一〔石〕（此間音道）<sub>〔去〕</sub>卦（上尺）<sub>〔入〕</sub>（一四七六）

〔道〕は呉音平声濁

右四字、『撰・善・奉・道』は、上声全濁字である。この四例の去声点加点例は、上声全濁字の去声化例であると判断される。

図書寮本『類聚名義抄』院政期点における漢音声調

表3 図書寮本『類聚名義抄』同音字注声点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	36 (10)	15 (4)	108 (15)	86 (10)	1											
平輕	72 (18)	7 (6)	14 (3)	2 (1)			1									
上			1		39 (7)	12 (1)	12 (4)	24 (2)	1		1					
去		1			1		4		48 (21)	8 (2)	36 (4)	26 (5)				
入輕													40 (14)	4 (1)	8 (5)	34 (3)
入													16	5 (2)	32 (2)	4

下段のくく内は、仮名音注による声調表示を同様に処理した数で、外数。

B. 掲出字声調と一致する声点を同音字に加点した例

本資料の同音字注声点には、同音字注の『廣韻』声調とは異なる加点が存し、その中には、「注字本来の声調を無視して、母字の声調にもとづいて加点する」ものがある、とされている。<sup>23)</sup>

具体例として、次の二例が挙げられている。

壞〈音恢(去)〉(二三三4) 塾〈音黠(去)〉(二一九4)

右の類例として、以下のものを指摘できる。(一)内に、『廣韻』の音を記す。

濫〈音醜(上)〉(四六一)〔濫—上声全濁匣母銜韻・去声次濁

来母談韻、醜—平声全濁匣母咸韻〕 諧〈音奄(平)〉(九七一)

〔諧—平声、奄—上声〕 炫〈音炫(上)〉(三八二)〔炫—上

声全濁、炫—去声〕

最後の掲出字「炫」の例は、本文同音字注が上声全濁字の去声化を反映した去声字で注したにもかかわらず、声点加点者が掲出字声調と一致する上声点を加点した例か、と思われる。

C. 連音上の声調変化を反映したと考えられる例

桃花—(石)〈此間音道(去)卦(上)尺(入)〉(一四七6)

「卦」は、『廣韻』では去声にのみ掲載されている。それに、上声点が加点されている。

右は、『倭名類聚抄』からの引用例である。『倭名類聚抄』の

「俗」「此間」を冠した音注は、掲出字の呉音形と声調とを、注字の漢音によつて示す例が大部分であることが指摘されている。<sup>23)</sup>

この例もそれにあたるとすると、掲出字「花」の呉音声調、去声または上声(法華経音義諸本に依る)を去声字「卦」で注した例ということになる。

ただし、平安後期以降の呉音には、連音上の声調変化が見られる。<sup>23)</sup>「花」の上接字「桃」の呉音声調は、去声または上声である(親鸞『観無量壽経』の声点に依る)。よつて、去声字「花」が続くと、「花」の調値は上声と同一となる。その調値を表示するために、「卦」に上声点を加点したのが、右の加点例であろう。

もつとも、これが『類聚名義抄』声点加点者の判断によるものか否かは、不明である。『類聚名義抄』の原撰者は、『倭名類聚抄』の声点を「証拠」としたであろうことが言われており、<sup>24)</sup>『倭名類聚抄』十巻本の尊経閣文庫蔵明治時代写本には、「此間音道(去)卦(上)尺(入)」(一四ウ)とある。したがつて、この例は、『倭名類聚抄』訓点本の声点を移点したものかもしれない。

D. 加点理由不明の例

擴〈音曠(上)〉(二二三3)

掲出字「擴」・同音字注「曠」とも、『廣韻』去声字である。ただし、「擴」は、慧琳『一切経音義』には、上声の反切例「廓廣

反」(二三六)が存する。あるいは、これを同音字に加点したものであるうか。

#### 濁(音混〔平聲〕)(三四三)

掲出字「濁」は、「廣韻」去声字である。これに、上声全濁字の同音字注「混」を付している。「混」には、本資料内に、他に、「混」(弘云古混〔上〕反)〔二六六一〕がある。また、慧琳「一切経音義」でも、平声の音注しか見られない。よって、右例の平声軽点は、不審である。あるいは、声点加点者が当該例を、「昆」(「廣韻」平声全清字)と誤認したものかもしれない。

以上、今回対象とした同音字注に加点された声点は、原則として、「廣韻」の声調と一致する。

ただし、四例ながら、全濁上声の去声化例を指摘できた点は、重要である。

#### 5、右以外の注文字声点

これまで取り上げた例以外の注文漢字に、漢音声調を示すかと思われる声点を直接加点した例に、次のものがある。

#### 一(濺)〔去〕(二〇四)〔去声全清〕

この声点も、「廣韻」声調に一致している。

図書寮本『類聚名義抄』院政期点における漢音声調

#### 四、声調表示を兼ねた仮名音注

図書寮本『類聚名義抄』における声調表示を兼ねた仮名音注には、すでに検討が加えられている。

ここでは、それらを加点箇所別に掲げる。

#### 1. 掲出字に加点された例

汎(ハム) 灑(サト) 平聲(トソ) 上声(トソ) 去声(イ/テ) 選(二〇六)  
右は、小松著書五〇八頁にも「図版一」として掲げられている。

「汎」は、「廣韻」去声字で、仮名音注が示す声調は、これと一致する。

「灑」は、「廣韻」上声麻韻および去声眞韻字である。よって、右例で、上声の位置に書き込まれた「サ」は、上声麻韻の音を表示している。しかし、仮名音注「シ」が示す平声輕に一致する音が「廣韻」には掲載されていない。「集韻」でも同様である。ただし、「韻補」(古逸叢書所收遼寧省圖書館藏宋刻本に依る)には、「叶山宜切音詩」の注が有る。反切上字「山」は全清字、反切下字「宜」は平声字であり、同音字注「詩」は平声全清字である。右例で、平声輕の位置に書き込まれた「シ」は、この音を注したものかもしれない。

## 2. 反切上字に加点された例

反切上字には、この音注が加点された例が無い。

## 3. 反切下字に加点された例

反切下字への加点例は、次の三〇例である(表2の下段)。(内)、その数のみ記した。最後にまとめ、○を付した四例は、小松論文で採られていない例(「」に当該字の「廣韻」声調・清濁と韻目(平声で代表させる)とを記した)。△を付したものは、声点の位置が小松の認定と異なる例。以下同様。

- 鈔(サム志)(一二六) 溜(リウ志)(一六三) 狡(カウ上)(四二四)  
 俱(ク平聲)(七四四) 迸(ヘイ志)(九二四) 幼(イウ志)(九三  
 三) 蔭(イム志)(九四一) 細(セイ志)(九四三) 諫(カン志)(九  
 六六) 歇(ケチ入聲)(九九四) 陸(リク入聲)(二〇七六) 鄧(ト  
 ウ志)(一二七二) 茗(メイ上)(二二二二) 氏(シ上)(一三四  
 一) 衫(サム平聲)(二四一五) 偃(エン上)(二四二三) 胡(フ平  
 一)(二七九三) 干(カン平聲)(一九四四) 絳(カウ志)(二四七  
 七) 潰(フイ志)(二六五五) 亮(リヤウ上)(二八一二) 乙(イチ入  
 聲)(二八一七) 于(ウ平聲)(三〇四二・三〇四三) 諫(カン志  
 三)(三四〇四) △乖(フイ平)(二七三一) ○閉(ヘイ志)(九四二)  
 〔去声全清竇韻〕 ○銜(カム平)(二四二二) 〔平声全濁銜韻〕  
 ○皮(ヒ平)(二二四七) 〔平声全濁支韻〕 ○柯(カ平)(二四

## 二七) 〔平声全清歌韻〕

すでに指摘されているとおり、加点位置は、『廣韻』における該字の所属声調と一致している。

ただし、表2の下段(「」内に記した通り、『廣韻』平声全清字に平声重の位置への加点三例、平声輕の位置への加点二例、というの、意味のある数かも知れない。声点と同じく、反切下字は反切上字に比して、輕重の区別を嚴密には行なっていない。

## 4. 同音字に加点された例

同音字注に加点された声調表示を兼ねた仮名音注は、左の全一二七例である。

- 奄(エム上)(一二六) 疏(ソ平)(二三四二) 泄(エイ志)(三五六)  
 弗(フッ上)(四九四) 奏(ソウ志)(五一四) 貂(テウ平聲)(六七  
 七・六八一) 娟(エン平聲)(六九四) 澗(カン志)(七一二) 迅  
 (シン志)(七三三) 係(ケイ志)(七四三) 辞(シ平)(七四五)  
 素(ソ志)(七五五) 弑(シ志)(七七四) 住(ヂ上志)(七八七)  
 垓(カイ平聲)(七九四) 沸(ヒ志)(八九二) 胃(キ志)(九〇四)  
 贊(サン志)(九六三) 怡(イ平聲)(九七四) 瑳(サ平聲)(一〇  
 四二) 差(シ平聲)(一〇四三) 敲(カ下上ウ平聲)(一〇五五)  
 膚(フ平)(一〇五五) 舜(セイ志)(一〇七二) 沓(タフ入聲)(一  
 〇八二) 鍾(ショウ平聲)(一〇九六) 條(テウ平)(一一一)

鏘(サウ平) (一一一五) 露(ロ去) (一一二一) 疏(シ平) (一一三七) 辟(ヘキ入) (一二七六) 癖(ヘキ入) (一二七七) 積(七キ入) (一一八一) 變(セフ入) (一二二四) 牒(テフ入) (一二二四) 寶(トウ去) (一二八二) 奇(キ平) (一二三四) 疵(シ平) (一二三六) 邲(ビチ入) (一二四二) 痔(チ上) (一二三八五) 歎(タン去) (一二四〇) 婪(ラム平) (一二四三) 陂(ビ平) (一二四八) 期(キ平) (一二八四) 沙(サ平) (一二五二) 擲(ラ上) (一二五七) 摘(タク入) (一二五四) 零(レイ平) (一二六五) 干(カン平) (一二六六) 煥(イク入) (一二八〇) 店(テム平) (二〇二一) 嶺(トウ去) (二〇二一) 筠(キン平) (二〇八三) 辟(ヘキ入) (二二八一) 時(シ平) (二二八三) 墮(タ上) (二二八四) 押(アフ入) (二二〇一) 怡(イ平) (二二一六) 否(ビ上) (二二二七) 紙(シ上) (二二五五) 遲(チ平) (二二五六) 警(クイ上) (二二八四) 胚(ハイ平) (二三三二) 汗(カン去) (二四五七) 萱(フム平) (二四六五) 奧(ウ去) (二六八三) 是(シ上) (二七一四) 叨(タウ平) (二七三七) 希(キ平) (二七三七) 戌(ヌチ入) (二七四六) 億(イク入) (二七四六) 素(ソ去) (二七五五) 渾(コン平) (二七七二) 諦(チイ去) (二七七四) 蔽(ヘイ去) (二七九四) 慢(マン去) (二八〇一) 握(テク入) (二八〇七) 篋(ヘイ平) (二八一) 簾(レム

平) (二八一) 維(キ平) (二八一三) 鱗(ハン平) (二八二三) 揮(クキ平) (二八二七) 亦(エキ入) (二八三二) 白(ハク入) (二八三七) 率(スチ入) (二八四五) 凡(ハム平) (二八四七) 泛(ハム去) (二八四七) 司(シ平) (二八七三) 訴(ソ去) (二八九三) 鉛(エン平) (二八九六) 體(テイ上) (二九二七) 淳(スキン平) (二九三三) 遁(トン上) (二九四一) 襄(ヤウ平) (二九四三・二九四三) 催(サイ平) (二九四四) 積(シ去) (二九六五) 剛(カウ平) (二九七四) 己(キ上) (二九七五) 聿(セイ去) (二九八三) 申(シン平) (二九九一) 施(シ平) (三〇二四) 銛(セン平) (三〇四七) 凌(リョウ平) (三〇七七) 溫(ラン平) (三〇八四) 醺(シ上) (三一〇一) 宏(ハウ平) (三一〇二) 蕤(スキ平) (三一〇六) 桓(ハク平) (三一八四) 弗(フ入) (三一八七) 頤(チ入) (三一九一) 屈(クツ入) (三一九五) 輟(テイ去・テチ入) (三一九六) 隈(ライ平) (三二五五) 依(イ平) (三二七一) 愆(ケン平) (三三二五) 俳(ハイ平) (三三四二) 昆(コン平) (三三五七) 提(テイ平) (三三三六) 平声全濁齋韻 ○摧(サイ平) (一四三三) 平声全濁灰韻 ○圭(ケイ平) (三三九一) 平声全清齋韻 ○咨(シ平) (七六一) 平声全清脂韻 ○趾(シ上) (二二二三) 上声全清之韻 ○漏(ロウ去) (二〇六七) 去声次濁侯韻 ○

測（シヨク入聲）（二五三・四）（入声次清蒸韻）

以上、小松論文に、七例を加えたにすぎない。加えた七例も、他例同様、『廣韻』の声調に一致する（表3の下端へ）内に、その数のみ記した。上声全濁字の五例も、すべて、上声の位置に仮名が加点されている。

5. 右以外の注文字に加点された例

右と同様の形式で、全七例を掲げる。

浙（七キ入聲）（二七三） 耶（ラ<sub>レ</sub>平）（二七四・五） 邪（ヤ<sub>ヤ</sub>平）（二七

四・五） 埏（エン平聲）（二二九・五） 惚（チウ<sub>レ</sub>去）（二六八・三） ○

澄（タク<sub>レ</sub>平）（四五六）〔平声全濁庚韻〕 ○—（泓）（ワウ<sub>レ</sub>平聲）

（四五六）〔平声全清耕韻〕

小松著書五〇八頁で、判読不能として除外された「—」（泓）（四五六）への加点例は、平声輕の位置から「禾<sub>ウ</sub>」が左斜め下に記入されているものと見た。右の九例も、『廣韻』声調に一致する。

五、声点および声調表示を兼ねた仮名音注の加  
点箇所の偏りについて

これまで見てきた、声点および声調表示を兼ねた仮名音注の加  
点数を、加点箇所別に整理すると、次表となる。

	声点	声調表示を兼 ねた仮名音注
掲出字	九一	三
反切上字	一三二	〇
反切下字	八四七	三〇
同音字	六九七	一二七
その他	一	七
計	一七六八	一六七

1. 声点加点的偏り

圖書寮本『類聚名義抄』は、掲出字に声点・仮名音注を加点することが希である。掲出字の音は、注文で示すことを原則としている。数少ない掲出字声点は、上声の全濁音字に集中しており、加点者は、特にその声調に注意を払ったことが明らかにされている。<sup>③</sup>

また、本資料の反切上字への声点加点数は、反切下字への加点数に比して、少ない。このことについて、小松英雄は、「わざわざ反切上字にまで声点をくわえなくとも、（略）利用者は輕重を判別できるのではないか」という見方に立っている。<sup>④</sup>

しかし、平安時代の字書は、圖書寮本『類聚名義抄』よりも反

切上字への声点加點例が多く、改編本『類聚名義抄』では、図書寮本『類聚名義抄』よりも反切上字への声点は減少する。

この事實は、前代の加點者よりも後代の加點者が輕重清濁に詳しかったことの反映、と見るべきではなく、輕重清濁の習得が次第に困難になったことの反映、と考えるべきであろう。

図書寮本『類聚名義抄』における反切上字への声点加點も、その流れの中に位置づけられる。

## 2. 声調表示を兼ねた仮名音注加點の偏り

本資料全体では、声調表示を兼ねた仮名音注の加點数は、声点加點数の十分の一弱である。

それを踏まえて右表を見ると、声調表示を兼ねた仮名音注が、反切上字に皆無であることと、同音字に集中することとに注目される。

反切上字への仮名加點例は、次の一例のみである（小松著書五〇八頁に〔図版3〕として掲げられている）。

所都（弘云旦胡<sup>コ</sup>反）（二七九三）

ただし、右の「タン」は、音形のみを表示し、声調を表示していない。

反切上字に、一例しか加點が見られないのは、被注字の「輕重

清濁」を示す反切上字に、全音形と声調とを記す必要がない、と判断されたためであろう。反切上字の全音形および声調を記すことは、被注字の音形・声調を導く際の妨げとなる場合もある。

たとえば、右の「旦」は「廣韻」去声字であるから、「タン」を去声に加點したとする。その場合、日本漢音声調の六声体系において、去声は輕重を区別しないので、掲出字「都」（「廣韻」平声全清字）が輕声であることを示すことができない。

また、声点加點にも共通する問題として、反切上字の日本漢音声調における輕重を加點した場合、それが被注字の輕重と一致しない場合があることが挙げられる（たとえば、被注字が平声次濁字であり、反切上字が入声次濁字である場合、被注字は重声、反切上字は輕声となる）。

一方、反切下字には、少ないながら、声調表示を兼ねた仮名音注加點例が見られる。これは、被注字の声調と韻の音形とを示す反切下字において、声調と音形とを同時に示すこの方式が有効であると判断されたためであろう。

しかし、この方式がもつとも有効であるのは、同音字注についてである。同音字注にこの音注を加點すれば、被注字の全音形を示すと同時に、声調をも示すことができる。この方式の加點が同音字注に集中するのは、そのためであろう。

右表で、「その他」とした九例も、先に具体例を掲げたとおり、すべて、注文字の全音形と声調とを、直接示した例である。

## 六、声点および声調表示を兼ねた仮名音注から知られる声調体系

### 1. 掲出字の声調体系

先に、小修正を加えたが、掲出字声点に関する小松の検討結果に影響はない。

小松が注意した、上声重点と判断される声点加點例は、筆者の判定では、次の十五例である。

- 踐（一〇八三） 距（一一一七） 豎（二二九七） 峙（一一三八五） 嶼（二四三六） 部（二七八六） 墮（二九七五） 限（二〇四三） 塚（二二八五） 坐（二二九三） 恃（二四〇六） 憤（二五一三） 幌（二八五三） 袒（三三三三） 被（三三三四六）

右は、全例、全濁上声字である。全濁字以外の上声字に、やや下方の上声点が加點された例は、無い。

しかし、全濁上声字にも、他の上声字と同様の上声軽点が加點された例が存することも、小松の指摘の通りである。

この実態を、小松は、「上声軽」と「上声重」とが、《上声

tone)》を構成するふたつの *allophones* であり、一方の「上声重」が、実現された抑揚において去声調と区別をもたなかったために、この字群に特に注意ぶかく加點されている」（小松著書四七八頁）、と解釈している。

右に挙げた以外の上声点加點例には、全濁字も一九例含まれている。その中には、注文に、『倭名類聚抄』の「上声之重」「上声重」を引用している左の例も有る。<sup>③</sup>

蹠（一〇六六） 紵（三〇四四）

よって、掲出字声点加點者が、上声重を、声調体系の一つとして認識していたとは考えられない。小松説の通り、本資料の掲出字声点は、調値の上で六種を区別する声調体系を背景に加點された、と判断すべきであろう。<sup>③</sup>

### 2. 掲出字以外の声調体系

掲出字以外の上声点および声調表示を兼ねた仮名音注から知られる声調体系も、従来の研究で言われるとおり、平声・入声に軽重を区別する六声体系であることが確認できた（表2・表3、参照）。

## 七、むすび

従来の研究においては、図書寮本『類聚名義抄』の訓点によつ



て表示された声調が、『廣韻』声調と一致することが強調されてきた。たとえば、上声全濁字の去声化例が調査範囲に存しなかったことから、「その声点が全体に韻書に基づいて加点された」とされていた。

しかし、右に記したとおり、全体について調査してみると、反切下字に一例、同音字に四例の、全濁上声去声化例を指摘できた。

そして、本資料の訓点から知られる声調体系は、掲出字・注文とも、平声・入声に軽重を区別する六声体系であった。これは、日本漢音の声調体系として、もつとも一般的なものである。

さらに、本資料の加点が韻書・音義に基づく加点であるならば、『毛詩』平安中期点の四声体系や、『佛母大孔雀明王經』平安初期末点の十六声体系のように、正確に軽重を区別した加点がなされるはずである。

ところが、本資料の軽重の区別は、そのような厳密なものではなかった。しかも、その軽重の表示は、反切上字と反切下字および同音字との間で、厳密度に差が存した。これは、『妙法蓮華經釈文』平安後期加點・『孔雀經音義』院政初期点においても、見られた現象であった。

反切上字に声調表示例が少ないことも、軽重が次第に区別され

なくなる日本漢音声調史上に位置づけて、はじめて理解される。したがって、本資料は、中国中古音の体系に添った規範的な声調表示がなされているものの、他の日本漢音資料とまったくかけ離れたものではない。

院政期における日本漢音の中で、中国における規範をもつとも強く反映した層の加点がなされた資料、として位置づけるべきである。

#### 〈注〉

(1) 築島裕「国語史料としての図書寮本類聚名義抄」(『図書寮本類聚名義抄』一九六九年、勉誠社)に所収。その後の復刊本にも再録、参照。

(2) 小松英雄「日本声調史論考」(一九七一年、風間書院)第Ⅱ部第1章。

(3) 右注小松著書第Ⅱ部第2章。なお、上声字については、沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)第二章第五章、でも『廣韻』声調と一致することが確認されている。

(4) 注(2)小松著書第Ⅱ部第2章、参照。

(5) 注(2)小松著書、三七四頁。ただし、反切・同音字注声点は、上声点一三四例、去声点一九四例、であることが示されるのみ(四四〇頁)で、具体例は省略されている。なお、掲出字声点・朱仮名音注・水部反切字の『廣韻』上声字については、注(3)沼本著書第二章第五章、でも『廣韻』声調と一致することが確認されている。

(6) 宮内庁書陵部のご高配により、原本閲覧の機会を与えて頂いた。こ

こに明記し、書陵部長およびお世話頂いた皆様に、改めて御礼申し上げます。

(7) 注(2) 小松著書、四二〇・四八〇・四八一頁。

(8) この音義の原本閲覧の機会は、未だ得られていないが、カラー写真に依る限り、声点は一筆のようである。石塚晴通「唐招提寺藏孔雀経音義」(『北大国語学講座二十周年記念 論輯 辞書・音義』へ一九八八年、汲古書院)所収)にも、朱筆に複数のものが存するという指摘はない。

(9) 「タ」の右上に朱点がある。これは、濁点かも知れない。今は、指摘に留める。

(10) 注(2) 小松著書、五二二頁。

(11) 注(2) 小松著書、五〇八・五〇九頁。ただし、最後に挙げられた「測」(二五三4)で入声点と認定されたものは、虫損である。よって、本稿の検討からは除外する。なお、第三例の所在は(五三三3)、第四例の同音字注は「濁」に訂正すべきである。

(12) 注(2) 小松著書の認定より、六例少ない。一例は、前注の「測」である。また、「黎(平)」「紆(平)」「トウ(平)」「ツ(平)」「ワ(平)」「タ(平)」(三〇四3)の「ウ」は墨筆であり、「濁(平)」「タ(平)」の「タ」は別筆と判断したため、除外した。残る三例は、見出せない。

(13) 注(2) 小松著書五〇七頁および五二五頁にも同様の見解が述べられている。なお、これらの少数例に限って、声点と仮名音注とが併記されている理由は、つまびらかでない。ただし、この方式によって加えられた例に、俱(平)「(一〇五6)・狹(上)」「(二九五5)など、その声点加点位に仮名を書き込むスペースが無いものが含まれることは、確かである。小松英雄は、これらの例が本資料はじめに集中することを指摘し、途中から「位置に意味をもたせる方式にきりかえられた」としている(注(2)著書五二五頁)。しかし、本文に記したとおり、この方式は、三〇〇頁以降にも初めと同程度の集中を見せる。

(14) 注(2) 小松著書、第Ⅱ部第2章。

(15) 小松著書の誤植を指摘する。(誤)紆→(正)紆(三二五7)。

(16) 改編本『類聚名義抄』観智院本では、字体注は見られないものの、「礦」が見出し字に並記されている(法中二ウ8)。ただし、金部(僧上六四オ5)の「礦」の注文では、「礦」「礦」をともに「正」としている。鎮国守国神社蔵本(下一四〇ウ5)でも同様である。

(17) 注(2) 小松著書三七三・三七四頁において「第一群」と名付けられた音注である。ただし、後に述べる如く、同音字注においては、公任の正音をも対象とする。

(18) 反切上字に声点加し、反切下字には加しない例は、全体で三例ではない。そこで、反切下字に声点加点が存する反切について、その反切上字の声調と声母とを調べてみた。その結果、『廣韻』上声字は、全清字九五例、次清字三二例、次濁字五九例、全濁字三五例であった(すべて延べ数)。反切上字として使用されている上声全濁字は比較的少ないが、次清字よりは多い。その全濁上声字に加点がなくことには、何らかの意味があるのかも知れない。しかし、全体の声点加点例が少数であるため、ここでは、事実の指摘に留める。

(19) 醍醐寺蔵「妙法蓮華経釈文」平安後期点および唐招提寺蔵「孔雀経音義」院政初期点においても同様であった。佐々木勇「醍醐寺蔵「妙法蓮華経釈文」の声点加点について——前後半の相違と表紙見返中段記事の解釈——」(『訓点語と訓点資料』第一〇三輯、一九九九年九月、同「唐招提寺蔵「孔雀経音義」院政期点の声調体系——反切を有する前半部分について——」(『国文学』第一六九号、二〇〇一年三月)、参照。

(20) 注(3) 沼本著書では、水部に限っての調査であった。

(21) 渡辺修「圖書寮蔵本類聚名義抄と石山寺蔵本大般若経字抄について」(『国語学』第十三・十四集、一九五三年十月)。

(22) 石山寺蔵「大般若経字抄」の対応箇所(正河)音計(三オ5)、音

低ノ正第(四ウ4)、「正虐」音送(二二オ3)送(二二ウ2)、「正還」貫(一八ウ5)には、声点が加添されていない。また、圖書寮本「類聚名義抄」には、「公云音帆(ヶ去)」(二七四一)のように、声調表示を兼ねた仮名音注が公任音にも付されている(以下、去声の位置に書かれたケの仮名を、(ヶ去)と簡略に表記する)。この注音法は、石山寺蔵「大般若経字抄」には見られない。

よって、「大般若経字抄」から引用した音注への声点および仮名音注も、圖書寮本「類聚名義抄」の加添者が新たに加添したものである、と考えられる。

なお、正音注に声点加添がない「大般若経字抄」からの引用例に、以下のものがある。

誼(公云音官(去 正喧)(八二二) 聲(公云音永(平) (略) 正榮

(一六四四) 隠(公云音殷正引)(二〇六三)

(23) 佐々木勇「古字書における反切・同音字注への声点加添について」

〔訓点語と訓点資料〕第一一五輯、二〇〇五年九月、参照。

(24) 注(2) 小松著書、四七〇頁。

(25) 江口泰生「和名類聚抄」の「俗」音注」〔国語学〕第一四一集、

一九八五年六月。

(26) 注(3) 沼本著書、第一部第四章第二節、参照。

(27) 馬淵和夫「和名類聚抄古写本声点本 本文および索引」(一九七三

年、風間書房)。

(28) その他、注末周辺の和音・呉音記分のものは探っていない。たとえば、二八八1に、「初学記云」として、「春秋」以下の書名に声点が加添されている。これらは、呉音声調を示しているかと判断して、対象から外した。

(29) 注(2) 小松著書、第II部第3章。

(30) 注(2) 小松著書、第II部第2章。

(31) 注(2) 小松著書、一五三頁。

(32) 注(23) 佐々木論文、参照。

(33) 注(19) 佐々木第一論文、参照。

(34) 他に、「上声之重」の注文を持つ上声軽点加添例に、「廣韻」に清音でしか記載されない「紆」(三三五7)が有る。

(35) 平安後期加添の「妙法蓮華経釈文」においても、加添者の声調体系は六声であった、と考えられた(注(19) 佐々木第一論文、参照)。

平安後期以降、六声より多くの声調を区別する声調体系は、實際上、伝承されなかったのではなからうか。

(36) 注(2) 小松著書、四八〇頁。

(37) 注(3) 沼本著書、一〇五七頁。

(38) 注(3) 沼本著書、第二章第四章第五節・同第一節、参照。

(ささきいさむ・広島大学大学院教育学研究科助教授)